

大学生の死生観と家族との関係について

— 発達に即した乳幼児期からの〈いのち〉の教育についての検討 —

The view of death and life among Japanese university student and their relationship with their family

— A suggestion of “Life and Death Education” in response to growth from infancy —

次世代教育学部こども発達学科

三木 澄代

MIKI, Sumiyo

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：生命観・死生観，発達，家族，喪失体験，開発・予防，〈いのち〉の教育

要約：近年わが国では自殺者が年間3万人を超え、いじめ等を背景とする若年者の自殺も続発している。また、DV・児童虐待や自傷・薬物乱用、大災害や重大事故等命にかかわる深刻な事態・事象が頻発し、事件・事故発生後の対症療法的対応だけでは不十分な状況にある。すべての子どもへの、発達に即した計画的・継続的に命を大切にすることを育む開発・予防的な積極的働きかけが喫緊の課題である。基盤となる死生観は乳幼児期からの発達過程において漸成し、子どもの発達の鍵となる身近な大人とりわけ家族、保育・教育者の死生観が問われる。そこで保育者をめざす大学生の死生観の実態調査をもとに、家族との生死・命についての対話や喪失体験・喪の作業が死生観形成に及ぼす影響について考察をすすめた。また、発達に即した〈いのち〉の教育の内容や家族支援や保育者養成における課題について検討した。

〈いのち〉：命の心理・社会的側面を明確化する表現としてひらがなを使用

I はじめに

神戸市の少年Aによる連続児童殺傷事件（1997）をはじめ、いじめによる暴力やリンチ殺人など児童生徒による凄惨な殺人事件が後を絶たない。また、自殺者が年間3万人を超えることが常態化し、近年小中学生を含む若年者の自殺が漸増の傾向も見られる。児童生徒の命の安全・安心を守り育てる場であるはずの学校・家庭で体罰や虐待などが頻発し社会問題化している。市中でも無差別殺傷事件や悪質な交通事故等々が発生するなど、社会全体に生命尊重の理念が薄れていることは否めない。

このようななか、阪神・淡路（1995）ならびに東日本（2011）大震災や原発事故等の災害・事故を契機に「命」の大切さへの気づきが促され〈いのち〉を守り共に支え合う取組や活動が進められているところであるが、〈いのち〉を軽視したこれらの現象を防止する

抜本的かつ早急な対応が求められる。事件・事故への危機介入や事後対応にとどまらず、保育・教育においてすべての子どもの命を大切にすることを育む必要性が一層大きくなっている。

II 問題の所在と研究の目的

自殺・殺傷事件、災害・事故の発生状況の現状をみれば、一時的・断片的対症療法では安全安心な人間関係や命を大切に判断力・行動力を培うことが難しいことは明らかである。教育基本法（2006）にも、教育の目標として「生命を尊び、自然を大切にし…」と明記している。「新・児童生徒の問題行動対策重点プログラム（中間まとめ）」（2006）において命の教育の強化を求め、「生徒指導提要」（2008）では「生と死の意味について真剣に考え、命のかけがえのなさや人生が一度しかないことについて理解し、命の大切さや生

きる喜びを実感としてとらえる場が必要」として命の教育の充実を図っている。

しかし、これらは小学校教育以上を対象としており、兵庫県の先駆的な「『命の大切さ』を実感させる教育プログラム」(2006)による実践・教員研修も小学校以上のもので、発達に即した乳幼児期～思春期・青年期に一環する〈いのち〉の教育は体系化されていない。

また、全国各地で数々の取組が実践されているにもかかわらず、その広がりには断片的・限定的である。筆者が在住する自治体や所属団体(「いのちの教育実践研究会」「生と死を考える会」)による調査(2006)から、実践充実の課題として指導者・保護者の死生観や教育観等、周囲の大人側の問題の理解と対応の必要が示されている。

以上により、本研究では、将来〈いのち〉の教育の実施主体あるいは保護者となるべき大学生の適切な死生観形成が、発達に即した〈いのち〉の教育普及に向けた主要課題の一つであるとの観点に立ち、大学生の死生観の実態について調査するとともに、保育・教育者養成における課題について考察をすすめる。

Ⅲ 先行研究に基づく〈いのち〉の教育をすすめるための視点と課題

1) 「発達」「保育者」「家族」の視点の必要性について

田沼(2007)は、義務教育段階における生命尊重カリキュラム構想の課題の研究において、生命尊重教育が生命軽視の社会的風潮が蔓延する中で思うような成果を見るに至らない現状の要因について以下のようにまとめている。1点目に「発達の視点」の軽視をあげ、生命観ならびにそれと同義的に重なり合う「死生観」の認識プロセスには発達という視点が不可欠であるとしている。2点目は、指導する教師の生命観の影響力である。生命観は個々の内面に形成される個別的な経験の蓄積であり、学校での体系的カリキュラムのもとにおいても指導場面では教師の生命観が影響すること、カリキュラム編成が主目的となり教師の具体的な生命観や指導観の問い直しがなござりにされがちであることを指摘している。3点目には、子どもの生命観形成に及ぼす家庭・地域等の環境要因をあげている。子どもは大人の鏡像であり、日常環境としての家庭・地域等に表向きの生命尊重観と裏腹な実態があれば致命的であるとして、家族をはじめとする身近な大人の生命観・死生観と生活における関係が子どもの生命

観・死生観形成へ影響の大きさを指摘している。

2) 〈いのち〉の教育における保育(教育)者・家族の生命観・死生観形成の影響について

田村(2007)は、「小・中学生と大学生を対象とする「生命に対する意識調査」」に基づき、加齢とともに自己生命へのまなざしやその有限性への自覚化傾向が強まるなど、加齢による生活体験の拡大が生命観に影響を及ぼすとしている。また、自己・他者の生命へのまなざしには「生命誕生遭遇体験」が及ぼす影響に比べて「死遭遇体験」が及ぼす影響が大きいこと、自己生命の肯定感や自己生命へのまなざしについては「生命誕生遭遇体験」の影響が大きいことを統計的に見出している。これらから〈いのち〉の教育のカリキュラムにおいて、発達に即して「生命誕生」「死」両方の遭遇体験のバランスが重要であることがわかる。

加齢とは発達過程そのものであり、保・幼、小中学校、高校、大学における教育と、家庭・地域での生活体験をとおして子どもの生命観・死生観と生命尊重の意識が漸成することが示されている。生涯自己存在を受容し支える自己生命の価値の実感とは、乳幼児期にはぐくまれる基本的信頼や愛着の形成が基盤である。加齢とともに生活体験が拡大する過程において、子どもが望ましい価値観・意識を形成し適切に判断・行動する力を身につけるには、育ちを支える中心的人物である保護者(多くは親をはじめとする家族・保育者教育者)の価値観・意識が鍵となる。

3) 大学生の生命に対する意識の重要性について

大学生は、自己の確立を課題とする青年期というライフステージにあり、家族心理学視点にたてば家族のライフサイクルの第一ステージ、将来親となり家族の中心として家族を形成・維持し子どもを養育するための準備期にある。乳幼児期に育むべき基本的信頼や愛着が自己生命の価値の実感と、自他の生命を尊重する意識や行動の基盤である。現在の青年の生命観・死生観が次世代の生命観・死生観に影響し受け継がれる。

田沼(2007)のいう発達に伴う生命観の社会的視点への移行、佐伯・高内(2008)の健康教育の視点からの死生観の調査結果をふまえ、大学生の生命観・死生観の実情把握と大学教育における課題の明確化が〈いのち〉の教育推進への力になるものと考えられる。

IV 保育学生の死生観の実態についての調査から

1) 実態調査

- (1) 対象：A大学（保育・教育系）1～3年生
 (2) 方法：質問紙調査（質問項目45）
 3～5件法または自由記述
 (3) 時期：2012年12月中旬
 (4) 回収数：170

2) 結果（抜粋・要約）

結果① [質問] 人は死んでも生き返ると思いますか。

- 〈回答〉 1 生き返る……………13（8%）
 2 たぶん生き返る……………27（16%）
 3 たぶん生き返らない……………31（18%）
 4 生き返らない……………97（57%）
 無回答……………2（1%）

「生き返らない」と回答した学生が6割弱であった。8%が「死んでも生き返る」とし、「たぶん生き返らない」を含めると約4割が死後生き返る可能性を否定していないことが示された。

結果② [質問] 学校のある日（登校日）、家でどのよう
に過ごしていますか。

〈回答〉 回答数（%）

時間 方法	しない	1時間 以下	2時間 以下	3時間 以下	3時間 以上
TV/DVD	8 (0.5)	38 (22)	46 (27)	23 (13)	42 (25)
PCゲーム	96 (56)	43 (25)	8 (0.5)	9 (0.5)	7 (0.4)
メール/HP	6 (0.3)	26 (15)	27 (15)	25 (15)	73 (43)

全くTV/DVD、PCゲーム、メール/HPをしないと回答した者は170名中1名のみで、ほぼ全員が日常的に情報機器・PCを使用している。PC・スマートホンでメール・チャットのために使用する傾向が顕著で、特に約4割が3時間以上メール・チャットに費やしている。

結果③ [質問] これまでに誰の死を体験しましたか。

無回答3名、どの年代においても誰の死も経験していないと回答した者はいなかった。ほぼ全員が、誰かの死を体験している。ただし、父母、きょうだいの死を体験した者は全体の1割未満と極めて少なく、多くは祖父母の死である。ただし、この質問による回答からは、これらの死別体験の対象が同居の家族かどうか、また同居の家族の場合どの程度の期間を同居したか、直接「死」の場面に遭遇したかどうかなど、死別体験の対象との関係性や死別体験の

具体的内容については把握できていない。また、それぞれの死について、その原因についても把握できていない。

〈回答〉 **各時期における死別の対象** 回答数

	父母	祖父母	きょうだい	友人	その他	経験なし
小学以前	0	28	1	22	22	89
小学校	1	38	1	11	35	72
中学校	0	26	1	15	52	62
高校	5	37	1	21	37	60
大学	1	21	1	10	28	83

結果④ [質問] 「本当に人の〈いのち〉は大切だ」と
心の底から感じたことがありますか。

- 〈回答〉 1 ある……………144（85%）
 2 ない……………7（0.4%）
 3 覚えていない（わからない）…18（11%）

結果⑤ [質問] 今までに「生・死」や「いのち」につ
いて誰とよく話しましたか。（複数回答）

- 〈回答〉 1 父母……………56（33%）
 2 祖父母……………15（9%）
 3 きょうだい……………6（4%）
 4 学校の教師……………32（19%）
 5 友だち……………58（34%）
 6 話していない……………28（17%）
 7 無回答……………2（0.1%）

〈いのち〉について話す体験は、全回答者のうち父母と友だちがそれぞれ3割を超え、わずかにではあるが友だちと話す者の方が多かった。ただし、祖父母・きょうだいなどを含めると家族・親族が最も多い。学校の教師と回答した者は5分の1弱であった。話していないとする回答も約16%みられ、全体の5分の1弱の者は、これまでに〈いのち〉について他者と話す体験をしていないということが示された。

結果⑥ 結果④・⑤のクロス集計

上記結果④・⑤の結果をクロスさせたところ、「本当に人の〈いのち〉を大切なんだ」と心の底から感じたことがあると回答した144名（全体の85%）のうち、誰かと話した体験がある者は132名（92%）であった。一方、誰も話していないとした28名のうち18名（64%）が「本当に人の〈いのち〉を大切なんだ」と心の底から感じたことがない又はわからない（覚えていない）と回答していた。一方「本当に人の〈いのち〉を大切なんだ」と心の底から感じ

たことがある者のうち、誰とも話していないと回答したのは10名（36%）であった。

「本当に人の〈いのち〉を大切なんだ」と心の底から感じたことがある者で、誰かと話した体験がある132名のうち、父母・祖父母・きょうだいを含む家族と話したことがあるとした者が65名（49%）で、そのうち55名（85%）は父母および父母を含む家族とよく話したことがわかった。また、友だちと話した者は56名（42%）、学校の教師と話した者は30名（23%）であった。（表1～5）

表1

(表中数字：度数)		生・死について【家族】と話した		合計
		いいえ	はい	
心の底から命の大切さを感じたことがある	ある	79	65	144
	ない	7	0	7
	おぼえていない	16	2	18
合計		102	67	169

表2

(表中数字：度数)		生・死について【教師】と話した		合計
		いいえ	はい	
心の底から命の大切さを感じたことがある	ある	114	30	144
	ない	6	1	7
	おぼえていない	17	1	18
合計		137	32	169

表3

(表中数字：度数)		生・死について【友人】と話した		合計
		いいえ	はい	
心の底から命の大切さを感じたことがある	ある	88	56	144
	ない	6	1	7
	おぼえていない	17	1	18
合計		111	58	169

表4

(表中数字：度数)		生・死について誰とも話したことがない		合計
		いいえ	はい	
心の底から命の大切さを感じたことがある	ある	134	10	144
	ない	3	4	7
	おぼえていない	4	14	18
合計		141	28	169

表5

【生・死について話した相手】と【心の底から命の大切さを感じた経験】のクロス				
生・死についてよく話した相手	命の大切さを実感した経験			合計
	ある	ない	おぼえていない	
父母	42	0	2	44
父母 祖父母	2	0	0	2
父母 祖父母 友だち	3	0	0	3
父母 兄弟姉妹 友だち	1	0	0	1
父母 友だち	3	0	0	3
父母 教師	2	0	0	2
父母 祖父母 兄弟姉妹 教師 友だち	2	0	0	2
祖父母	8	0	0	8
兄弟姉妹	1	1	0	2
兄弟姉妹 教師 友だち	1	0	0	1
教師	21	1	1	23
教師 友だち	4	0	0	4
友だち	42	1	1	44
誰とも話していない	10	4	14	28
無回答	2	0	0	2
合計	144	7	18	169

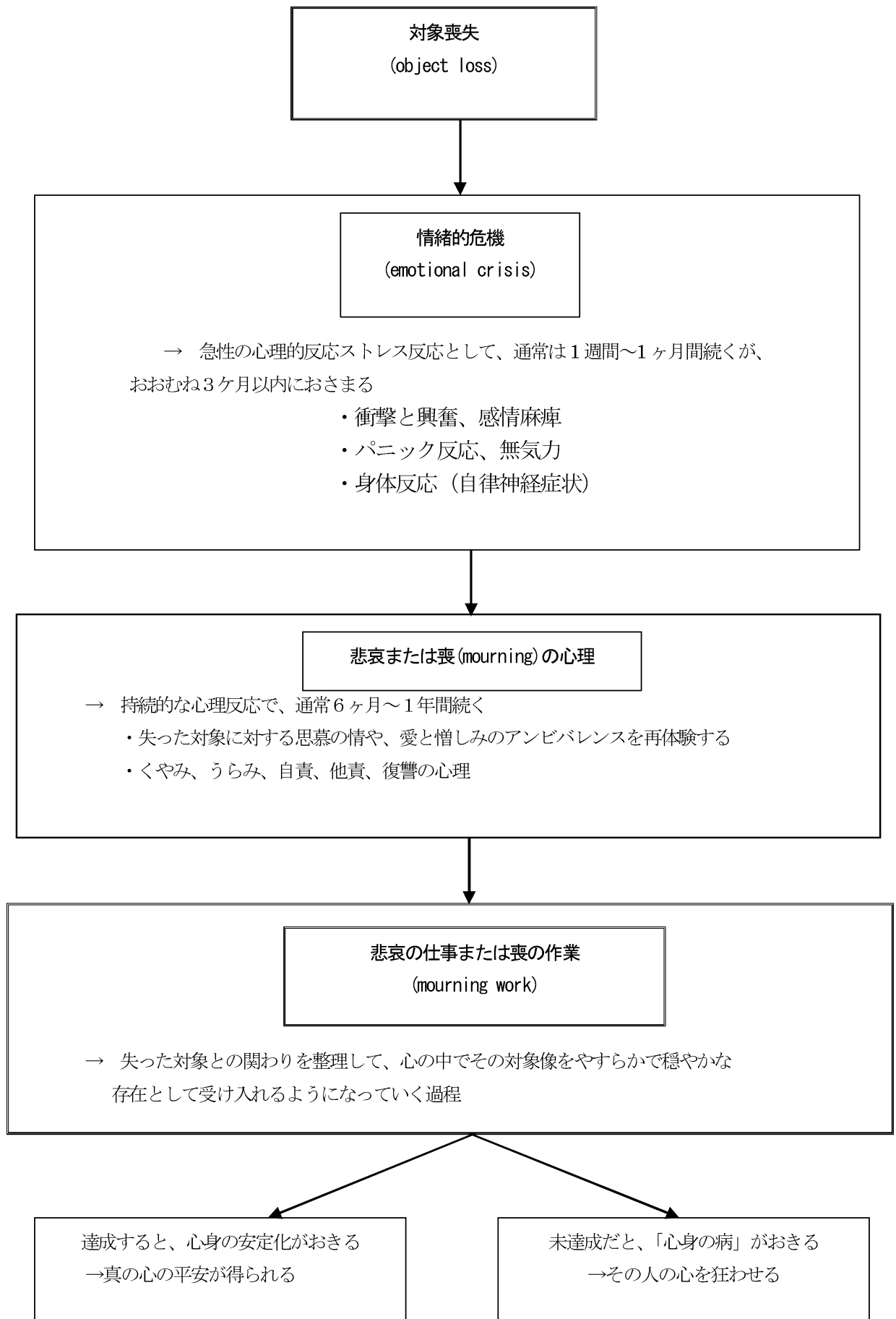
3) 考察

【対象喪失の視点から】(図1, 2)

「人は死んでも生き返ると思うこと」について

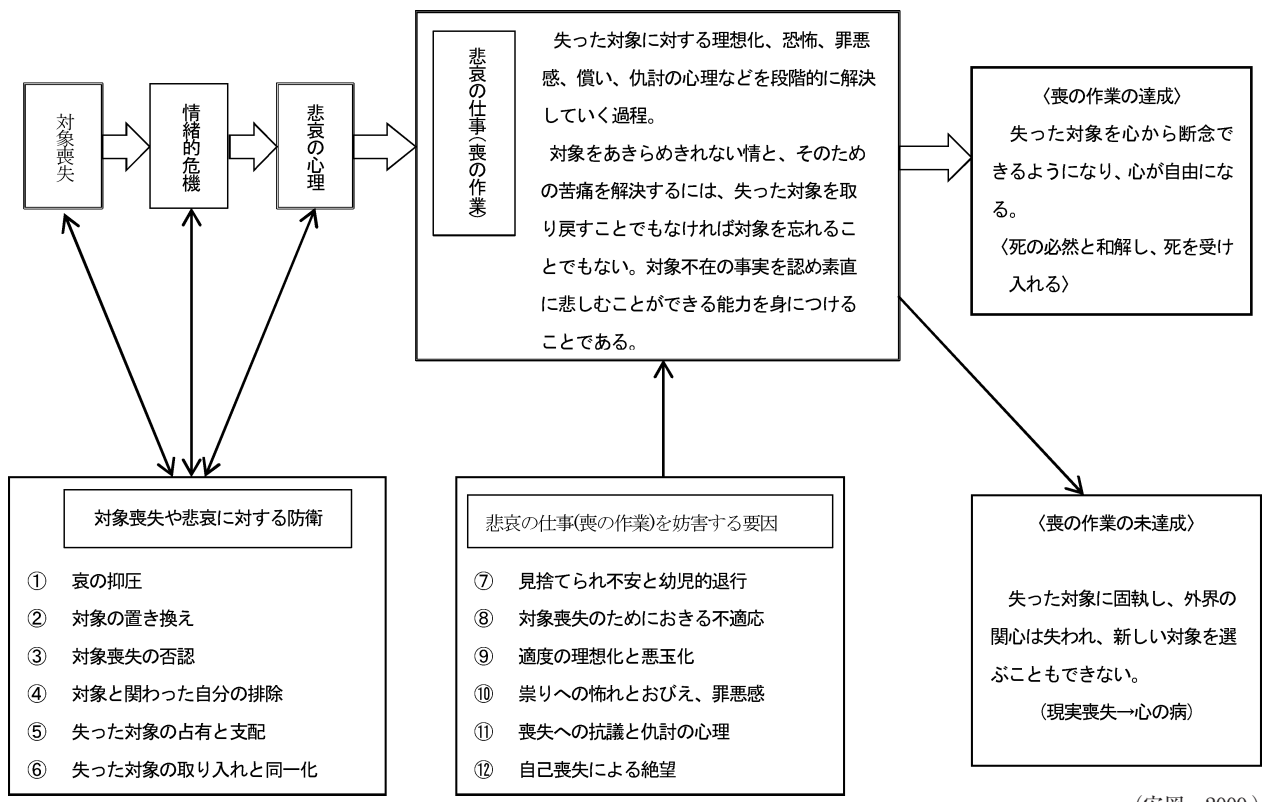
結果①で8%が「死んでも生き返る」とし、「たぶん生き返らない」を含めると約4割は生き返る可能性を否定していない。

生命観形成過程に関する研究において、清水(1992)は、縦断的・質的研究(幼児期(3歳)から15年間にわたる事例研究)をとおして、子どもの生と死の認識(死生観)の発達について考察を行っている。そのなかで幼児期については、「死」への関心は、3歳の時顔見知りの老人の葬儀を目撃した経験により芽生え、5歳期には生と死の概念はほぼ同時に芽生えているとして、命(生)への認識と、命の終わり・生の対極にある「死」への認識は表裏一体であると述べている。6歳時点では、自分がこの世に生まれ生きていることへの不思議に気づきみられるなど、小学校就学までに死生観の基盤が形成されていることも報告している。このことの一般化については、東京都立教育研究所の子どもの「生と死」に関する意識調査(1983)による幼児期の「生と死」に関する意識が未確立ながら幼～小1の時期において急速に認識が



(2009, 安岡)

図1. 対象喪失と「悲哀の仕事」の心理過程



(安岡, 2009.)

図2. 対象喪失と悲哀の仕事の達成課題と達成過程

深まるとの報告等国内外の研究における死の概念形成の時期の一致をあげて説明している。これらに基づけば、大学生が死の概念を認識していないとは考えにくい。田沼(2007)の調査における大学生での「生命の再生・甦り」肯定派が増大する傾向を示す結果と同様のものと考えられる。発達段階的な自他生命への理解が進み、生命観が生物学的視点(生きているか死んでいるか)から社会的視点(人と人のつながり)へと移行し変容した結果、願望として生じたものとする見方が妥当であろう。

死んでも生き返ると思う理由として「前世・来世の存在を信じている」「死後の世界がある」「生まれ変わると思う」「魂は生きている」「気持ちは残っている」

「人間ではなくても何かになって戻ってくる」「心の中で生きている」の記述がある。記述した学生の半数以上は、祖父母・親の死を経験していることから、家族と対象関係の喪失体験(結果③)が影響していると思われる。糸島(2005)が、看護学生と大学生の死生観形成に関する研究で、死別体験のある学生に「不死感・死後の世界」の得点が高い傾向があるとしていることと一致する。看取り・葬儀の準備の中で現実の死に出会い、喪の作業過程で、対象不在(死の不可逆性)の受容に再生の可能性(不死感・死後の世界)への希望を必要とするのだろうか。とすれば、対象不在の不安や死への恐怖など喪の作業に伴う苦痛との直面を避ける対象喪失への防衛とも理解される。

人は死んでも生き返るとパソコン使用時間の長さのクロス表

		パソコン使用(1日あたり)					合計
		しない	1時間以下	2時間以下	3時間以下	3時間以上	
人は死んでも生き返る	1 生き返る	0	0	4	1	8	13
	2 たぶん生き返る	1	4	5	6	11	27
	3 たぶん生き返らない	1	6	5	7	12	31
	4 生き返らない	4	19	12	15	46	96
合計		6	29	26	29	77	167

パソコンの使用: ゲーム以外の使い方(メール, チャット, ホームページ等)

次に、結果②に示すメール、チャットへの依存傾向と死生観についてであるが、インターネットを介した間接的・仮想性の高い関係の中で、現実・直接の人間関係の親密な対象関係の中での傷つきへの怖れ・見捨てられ不安から自己を防衛している可能性もある。

死んでも生き返ると思込むことは、死への不安・恐怖を緩和する自己防衛とも理解される。が、クロス集計からは、PC（メール・チャット）への依存度（利用時間の長短）と「死んでも生き返る」とする死生観との関連は低いことがうかがえる。むしろ、間接的・仮想的関係の人間関係が日常化する中で、そもそもの対象関係の浅薄化が喪失体験の傷つきを軽減し、死生観への影響を与えていると考えるのが妥当かもしれない。

いずれのことからも、意識的に死に直面する機会の中で、それに伴う不安・怖れ・怒り・悲しみ・罪悪感など苦痛と向き合うことで死生観形成がすすむことは明らかである。死が間接的になっている現代において、発達に応じた死、幼少期からの日常生活における対象の喪失の体験と、それらにおける喪の作業過程に寄り添い支える身近な大人の死生観と関わりが〈いのち〉を大切に作る心と力を育む鍵となる。

【家族の視点から】

糸島（2005）によれば、死別体験のない看護学生の死生観は、死別体験がある学生より〔友人〕の影響を受けやすく、死別体験のない一般学生の死生観は死別体験がある学生より〔先生〕からの影響を受けやすいと報告している。また、看護学生は一般大学生より〔祖父母〕〔友人〕による影響が大きいとしている。家族として最も密接な関係にある〔両親〕による影響はそれより小さい。

結果④⑤では、〈いのち〉を本当に大切だと実感したことがある学生が、「生・死」「いのち」について多く話した相手として父母が最も頻度が高い。一方、結果③をみると、圧倒的に祖父母との死別体験が多い。大学までに父母との死別体験が少ないことをふまえてこれらを見ると、祖父母との直接的関係における影響と、両親の祖父母との死別（親自身の親との死別）体験や喪の作業が、輻輳的に死生観形成に影響を与えるということではないだろうか。子どもが死生観を形成していく過程の中で、両親が体験する対象喪失と喪の作業を良くも悪しくもモデルとしてということでもあろう。

また、小林（2008）は、非行少年の行動科学研究の中で、児童期や青年期の暴力への暴露が被害者が加害

者への転化の要因になるとしながら、その保護要因として親による物理的安全・心理的安全と向社会的情報の提供をあげている。幼少期から青年期において、虐待・いじめ・体罰等の被暴力体験（目撃も含む）を最小限にし、子どもが主体的に社会に関わる力を、親（保護者）を中心として継続的に育むべきということである。離婚の増加や家族の形態・機能が多様化し、夫婦・親子をはじめとする家族の人間関係の変化が、子どもの〈いのち〉を傷つける行動に直結する。子どもに最も密接な環境である親（保護者）自身あるいは家族の発達を支える役割がより大きくなっているといえよう。

河合（1987）は、3歳頃の子どもの「思いのほか死について考えている」し、「大人が聴く耳をもっているときにのみ、子どもたちは死についての彼らの考えを語りかけてくる」と述べている。結果④の、ほぼ全員が〈いのち〉を本当に大切だと感じたことがあることと、その多くが「生・死」「いのち」について父母とよく話していること（結果⑤）から、親（保護者）が積極的に「生・死」「いのち」についての話をすることの重要性がみえる。また、話したことがないとする者も2割弱は存在することが注目される。この群は、子どもの心身の発達にとって適切な親子や家族関係の不十分さが懸念される。親自身の死生観形成や親子の会話の活性化への家族支援も不可欠であろう。

また、よく話した相手として「友人」をあげている者も少なくない。このことは、親・家族との関係以外に、同年代の友人・仲間や学校の先生との会話の重要性を示唆するものである。糸島（2005）の指摘する一般大学生の死生観への友人の影響をふまれば、友人同士「生・死」「いのち」についてどのような話をするかが問われる。家族と離れ長期にわたって同年代の子どもが集団生活を送る場での、保育者・教師・友人とのやりとりの積み重ねにきわめて重要な意味があるのである。鈴木（2007）は、小学校理科の解剖実習とその事前・事後学習の重要性について、実習そのものだけでなく前後に教師が生命観に対する理念をもって指導していくことで児童生徒がそれまでに獲得している断片的な情報をネットワーク化し、生命に対する認識を深めるとのべている。

子どもが体験や実感を社会適応的な一定の価値として内在化していく過程において常に問われるのは、親（保護者）をはじめとする家族およびその支援者（保育者・教師）の死生観であろう。

V まとめ・課題

1) まとめ

本研究において、多くの学生が〈いのち〉の大切さを実感していること、その実感と家族（特に親）と「生・死」「いのち」について話すこととの関連の可能性が見出された。また、友人・学校の先生など身近な他者と直接「いのち」について話すことの必要性や、家族・友人・学校の保育者・教師による積極的な関わりの重要性も浮かびあがってきた。

田沼（2007）による調査の結果においては、生命や死について語れる相手の存在については、小・中学生群で「いない」と回答している割合が高く、その背景を改めて生命や死についての問題と対峙する機会が少ないからではないかと推論している。そのことと、本調査から見出された〈いのち〉の大切さの実感が生・死やいのちについて家族と話す体験と関係している可能性とを勘案すれば、高校～大学という親からの心理的離乳を遂げ自己確立がすすむ時期において、家族以外の他者と生命や生・死について対話する機会を意図的に設けることの必要性は明らかであると考えられる。

「死んでも生き返る」という死生観について、対象関係論の視点から考察をすすめるなかで、生物的（肉体的）な死を認識しながら再生・復活を期待する情緒的・観念的な認識を優位とする特徴から、死別をはじめとする対象喪失と喪の作業を年齢段階に応じた適切なサポートの下で進めることの意義を確認した。特に、幼少期から日常生活の中で動物の死・人の死に遭遇し、身近な大人（家族、保育者・教育者）のもとでともにそれらに対する喪の作業（葬儀・墓参り・法要・日々の礼拝等）を体験することが生命尊重の意識や態度に大きく影響を与えることがうかがえる。

これらから保育・教育機関での〈いのち〉の教育実践において、〈いのち〉の教育の到達目標設定とその内容・方法の体系化とともに、その前提として指導者が自らの生命観・死生観を点検しより深め、価値観の共有をすすめるべきことを確認することができた。

2) 今後の課題

①保育者・教師ならびに保護者の死生観等の実態を把握し、科学的・客観的に分析して保育・教育現場での〈いのち〉の教育実践充実に向けた課題を明らかにする。そのために、大学生～成人の生命観（死生観）尺度を作成する。

- ②〈いのち〉の大切さの実感をベースに、発達段階に即したすべての児童・生徒・学生対象の開発・予防的プログラムのカリキュラム化を進める。
- ③親（保護者）をはじめとする家族への支援、家族・地域との協働の視点から教育実践を具体化する。

参考文献

- 糸島陽子 2005 「死生観形成に関する調査：看護学生と大学生の比較」京都市立看護短期大学紀要30, 141-147
- 梶田叡一 編著 2009 『〈いのち〉の教育（教育フォーラム44号）』金子書房
- 河合隼雄 1987 『子どもの宇宙』岩波書店
- 小林寿一 編著 2008 『非行少年の行動科学－学際的アプローチと実践への応用－』北大路書房
- 小此木啓吾 1991 「対象喪失と悲哀の仕事」『精神分析研究』第34巻 第5号 294-322
- 清水美智子 (1992) 「子どもはどのように生と死を認識していくのか（2）－発達人間学の課題としての死生観の探究－」大阪教育大学研究紀要第4巻第40巻 第2号
- 鈴木誠 2007 「解剖実習用ドライラボの教育的効果－「マイ・ガエル」作製で別次元の実習・観察を」, 遺伝学普及会編 生物の化学 遺伝, Vol. 61 No.4 77-80
- 田沼茂樹 2007 「義務教育段階における生命尊重カリキュラム構想の課題」高知大学教育学部付属教育実践研究センター研究紀要『教育実践研究』第21号 97-104
- 安岡 譽 2009 「梶井基次郎の精神分析的理解：喪失体験からみた彼の死生観形成過程について」札幌学院大学文学会紀要第86号 37-66